

『浮上儀式』 - 現楯松

※お読みいただく際はブラウザの横サイズを調節してください。より快適にお読みいただけます。

水面にぷかりと浮いているものがあった。

それはひとひらの造花の花びらだった。

おとぎ話から抜け出たような、鮮やかで黄色い花びらが、くるりとらせんを描いてソノの手から落ちる。水の張られた洗面器に浮かんでそとと波紋を立てる。一枚浮かんでもう一枚、次々と花びらが波紋を奏でるその様子を、ソノは床に座りながら見下ろしていた。

花びらは浮いたまま動かなくなった。やがて波紋も消え、水は沈黙した。ソノも黙って見つめる。眼には凜とした力強さが映っていた。無音の部屋の中に、溶けるようにして夕闇が差し込む。

数分後、彼女の右腕だけがすうっと動き、一枚の花びらをつまみ上げた。雫が数滴垂れる。その親指と人差し指を、流れる動作で洗面器の傍にあるゴミ箱の上に運ぶ。指を離すと花びらが落ちる。ソノの表情は凜々しいそのままに不動で、ゴミ箱を一瞥することもない。再び洗面器に右腕を戻し、一連の動作を繰り返す。同じペースで、けれど機械的でもない力に満ちた動作で繰り返す。乱雑にゴミが詰め込まれる中に、おとぎの花は紛れて消えた。

最後の一枚が消えると、皮をめくったように表情が透明になる。眼差しから鋭さが消えた。代わりに柔らかな弾力が満ちていく。ソノはゆっくりと床に置かれた洗面器から離れ、部屋の片隅に腰掛けた。

そしてまっすぐに顔を上げてこちらを向く。

「ユー、もう座っていいよ」

部屋に入ってから初めて、ソノが口を開く。何もかもを許すような穏やかな声だった。部屋を満たす緊張感が一気に解けた。

その日は中間テスト明けの初日で、午前の授業では半分の確率でテストの結果が返ってきた。英語が平均点少し下の自己最低点で、一番良かったのは日本史。尋ねてもいないのに、髪が生え際以外は真っ白な日本史の担当は、上位三人の得点をあげた。その中に自分の数字は含まれていない。やっぱりな、と思った。

休み時間には、次の授業で提出する宿題を広げた。顔を上げて左右に目線をやると、クラスメイトのほとんどが同じことをしていた。電波で操作されている機械の群れに見えた。

昼休みになってクラスの友達と集まる。机を動かして三つ横に並べ、対面式にもう三つ並べてほとんど固定された位置に座っていく。大きさといい中身といい、どれも大して変わりがない六つの弁当が広げられる。いただきますを適当に済ませ最初に出てきた話題は、予想通りテストについてだった。

「今回の日本史、あんまり良くなかった」

そう言うナナはけらけらと笑っている。私はみんなと同様、そうだねえ、と賛同する。語尾が間延びして自分の声じゃない気がした。

「ちょっと、ソノはそんなことないでしょ？」

うんうん、と何気なく言っていたソノの肩をこづき、左隣にいるクボタがくすくすと笑う。

「いや、まあ今回は普通だよ」

他の人は聞いてなんかいない。

「でも、上位三人に入ってるよね？」

「えーと、一応ね」

しょうがなく、といった感じでソノがうなずく。

「やっぱすごいなあ。脳みそ分けてほしいよ」

「ちょっと、私にもちょうだいよ。どこもらっても損しないし」

「そうそう、そうよねえ」

脳みその取り合いに話が進み、ソノ以外の四人は、「私三割」とか言い合っている。ソノ本人はこらえきれないといった感じで笑い出し、食事中に変な話はやめてよ、と言った。

私は、じゃあ二割、と左隣にいるソノをからかってみる。また冗談ばっか言って、という顔でソノが苦笑いする。私は本気だった。人の脳みそをもらっても気持ち悪いだけだが、私はソノの一部を少しでも分けてほしかった。

場を盛り下げまいとして笑ってしゃべる。自分でも笑顔が引きつっていると思った。きつと口だけがにやりと先走り、他の部分は取り残されている。特に両目は弓形に曲がることなく一番本当のことを語っているのだろう。周りの人間はそんなこと分かった上で笑い返してくる。こんな調和を繰り返している中に自分が混じっていることにふと気付くと、何もかもがつまらなくなってくる。

それでもにこやかな顔を作って昼食を進めながら、ソノの顔をちらりと見る。彼女は、どこでも目立つ。ぱっちり開いた楕円型の目に、バランスよくパーツの詰まった顔立ち。手入れの行き届いた短い髪。無駄な肉のない細い体と伸びた背筋。

大抵の教科では高得点を取ってしまうし、運動神経も悪くない。いつも明るく笑っていて自分の努力をひけらかさない。頭の回転が速いからみんなをまとめるのが上手い。現にこのグループのリーダー役だ。唯一美術の実技は苦手だけれど、諦めるところを見たことがない。不得意教科ですら彼女の魅力になる。

彼女が羨ましい。何もかもにおいて、到底勝てないだろう。私は日本史が得意な方だけど、クラスで一番ですらない。学年で考えると一桁にも含まれない。でも死ぬほど努力する気は起きない。

趣味だって外見だって、人と代わり映えがしない。まさに文字通りだ。私が他人と入れ代わっても分からない。

他の人より秀でているわけじゃない。クズでもない。かと言って「平凡」ですらない。全てがちょうど平均点の人間にでもなれたら特別だったのに。

私にはあまりに何もなかった。ソノのほぼ反対側にいた。私はソノのようにはなれない。どこにも行けない。

「園子、英会話の子が呼びだよお」

みんなが食べ終わって少しすると、廊下から声が聞こえた。今行く、と言って荷物を片付けてからソノが出て行くのを、小説を読んでいる途中で目にした。

「また呼ばれてるよ。勧誘しても無駄だつうの」

「ソノの英語力は欲しいだろうなあ。どうして部活入る気ないんだろ。もったいない」

「苦手でもいいからうちの美術部に来てくれないかなあ、幽霊部員ばっかなんだけど」

「映研も。もうつぶれそう」

みんなの会話が頭を素通りしていく。私は、本を読むと内容に没頭してしまう。本、特に小説を読むのは好きな方だ。だからと言って成績が良くなるということはない。愛読書もない。読んでると充実した気持ちになり、読み終わると不意に哀しくなって別の本に手を出す、ただそれだけだった。

「あれ、そういや何部だっけ？」

ワーコがこっちを向く。最初、本に没頭していて何を尋ねられたのか分からなかった。耳に入った声をリピートして確認している間に、ワーコは同じ質問を口にする。当然のように聞いてきた彼女にいらつきを覚えた。

「あれ、私も帰宅部だよ？」

わざと驚いた顔をして、さらさらとこぼれ落ちそうな心を隠す。何ヶ月一緒のクラスにいるのか、考えたくなかった。

「あ、ごめんねユー」

謝っているようには見えない。けれど笑顔で許すしかなかった。ユーと呼ばれるよ

うになった時点で私は諦めなければいけなかったのだと思う。

その点でもソノが羨ましい。「ソノ」と二文字で呼ばれるからだ。そして二文字目の「ノ」という力強い音の留まりに、門崎園子という人間の全てが現れている。私なんて、笠井百合の「ユ」の字の延長でしかない。「ユウ」でも「ユウ」でもなく、「ユー」。名前のたった一文字とその残りかすのあだ名で呼ばれている。いや、呼ばれることは少ない。たとえ呼ばれても、空気中に放り出された「ユ」の字はそのまま「一」の音に乗って霧散し、どこかの音に着地して落ち着くことはない。

放課後にみんなで、近くに新しくできた雑貨店に寄った。おもちゃとファンシーグッズとが置いてある。けばけばしくこまごまとした物の密集に、最初吐き気を覚えた。そんなこと、今この店にいる他の人は思わないのだろう。店内にいる人間の笑顔がまぶしい。自分の感覚がおかしいのか正しいのかなんて分からない。少なくとも、この店の基準ではおかしさに違いない。

みんながわーわー騒いで物色していた。私も混じって適当に商品を見ていく。すぐ目に付いた人形を手取る。二つの眼がバラバラに付いていた。別の商品も見る。一つ一つを見ればそこまで変ではない。色の鮮やかなただのガラクタだ。人形を軽く横に振ると、瞳の代わりにスパンコールがしゃかしゃかと揺れた。左右の目が不規則に動く。

再び店内を見る。すぐさま顔を伏せる。両目を潰した方がいいと思った。ガラクタは一つ一つとして見るしかない。その一つ一つが隙間なく埋まって構成された世界など、恐ろしくて見てはいられない。だから想像してはいけない。

ゆっくりと店内を回っていると、同じく一人で探しているソノを見つけた。しかし、いつもの彼女とは様子が違った。一見何気なく商品を探しているようだが、眼が真剣そのものだった。気になったものを手にとって、持ち上げたり触ったり表示を見たりしていた。見られていることにも気付いていない。こんなに冷やかな表情のソノを見るのは初めてだった。少し彼女から距離を置いて黙って観察した。

左手に下げた赤い小さめのカゴに、少しずつ商品が放り投げられていく。恐らくはこの後買う物だとしても、かなりぞんざいな扱い方だった。ストレスがたまって物に八つ当たりしているのだろうか。そんな彼女、想像もつかない。ますます眼が離せなくなる。

英字新聞柄の便箋、ピルケース、ゴム製の指人形。彼女がカゴに入れる物は、何か共通していた。けれどそれが何か思いつかない。心のどこかでは分かっているのに、言葉にはならない。胸の芯で混乱した。気付くと、ソノのカゴの中は商品で埋まっていた。

一度携帯を取り出して確認し、ソノはレジに向かう。私も後ろからついていった。レジには既にワーコとチホが並んでいた。ソノの全身にわずかな緊張が走るのが見えた。

「あ、ソノも買うんだ」

チホがソノに気付いて手を振ると、ソノはいつもの笑顔になる。その時ようやく、さっきのソノが素顔なのだと知った。

「うん、欲しくなっちゃって」

「ふーん、何か変わったものばかり買うねえ」

ワーコがソノの手に下がるカゴをのぞき、怪訝な顔をした。

「え、何言ってるの、可愛いじゃない？」

「ソノのセンスって独特。うーむ天才の考えは分からん」

前二人が清算を済ますとすぐ、ソノはレジにカゴを置いた。商品が多いのと店員がもたついているのもあって、会計に時間がかかる。合計金額が表示されるやいなや、ソノは代金を払い、もう一度携帯を見る。

「だめ」

澄んだソノの声が店内に響く。レジの店員が反応する前に、彼女は後ろを向いて早足に出口へ向かっていった。

「ソノ？」

「ごめん、用事あった。家に帰るね」

突然のことに呆然とするみんなに、ソノは振り返らずに答えた。

「また明日ね」

「お客様、あの、商品を」

困惑した店員が出口に向かって叫んだけれど、ソノはもう店を出た後だった。

「私、渡してくる」

商品の袋を抱えて、私はソノを追いかけた。

私は、それほど足は速くない。全力で追いかけても、ソノとの距離は開いていくばかりだった。お腹に力を込めてソノの名を叫ぶものの、反応はない。少しずつ、彼女が見えなくなる。

時刻から考えてソノの一本後の電車に乗って駅に着く。そこから一本裏手に入ると、彼女の家が見えた。外観は知っているが、今まで一度も家に入ったことはない。

チャイムを押しても誰も出ない。しかし外から見える部屋の明かりはついていた。窓からは中は見えないようになっているが、人の気配がある。

「ソノ、そこにいるんだよね」

返事はなかった。けれど胸の確信に任せて、無理やり玄関から中に入り、明かりのある部屋に足を踏み入れる。

そこで眼にしたのは、水面と花びらとソノの姿だった。私は圧倒的な空間に絶句し、その光景をただただ見つめていた。今までに味わったことが無いほどに心地良かった。

「毎日やってるの」

洗面器をはさんだ向かいに座った私に向けて、ソノは話しかける。入って左側の部屋の壁一面が、棚でふさがれていた。そこに雑然と並べられている物は、さっきの雑貨店の商品にどこか似ていた。部屋の他の空間は整頓され沈黙がふさわしいのに比べ、その一面だけが異質な空気を放っていた。

「毎日、夕方六時に、って決めてる」

彼女の言葉は、一字一句が丸い粒となって現実にこぼれ落ちるような強さで響いた。そして丸い粒はそのまま私に染み込んで熱を放った。

しばらくソノを見つめていると、ずっと彼女が立ち上がる。そのまま部屋を出て行った。私などここにはいないかのような振る舞いだった。わけも分からずにソノについて部屋を出る。

後ろ手で部屋の扉を閉めて廊下に両足を踏み出した時、急にソノが振り返った。目がくらむくらいの笑顔だった。

「何か食べたい物、ある？」

いきなりの変化に戸惑った。まるでさっきの行為など無かったかのように話しかけてくる。

「ねえ、聞いてるー？ 適当に作っちゃっていい？」

混乱して何も考えられなかったので、こくり、とうなずく。ソノは、分かった、と一言残して足早に奥のキッチンに進んでいった。何が起きているのかまるで理解できない。

遅れてキッチンに近づくと、トントンという調子の良い音が聞こえてきた。手馴れた手付きで野菜を切るソノの後ろ姿が見えた。ピン、と針金を通したような背中が目につく。

ダイニングテーブルの、ソノの背中が正面に見える椅子に腰掛ける。そのままぼんやりと、ソノを眺めた。

「私、手伝う」

「ん、いいよ別に。私一人でできるから」

ソノはこちらを向かずに軽く返す。口から出た言葉に、やけに深い重みを感じた。

鍋を取り出し、火にかけ、ぐつぐつと煮立てる。次第に、クリームシチューの香りが漂ってくる。どうして私はこんな所にいるのだろう。そういえば親に連絡も入れていない。どうしてソノは私の分まで夕食を作ると言ったのだろう。

そうこうしている内に、斜め右後ろから、目の前に暖かい湯気を放つシチューが置かれた。すぐ後に、同じく白い湯気の昇る茶碗が左にコトリと添えられた。テーブルの向かいには、既にソノの分もおいてある。

「できあがり、っと」

ソノは、自分の椅子の手前で一度背伸びをしてから席に着いた。ものすごく満足そうな表情をしていた。

「遠慮しなくていいから。おかわりもあるわよ」

もくもくと立つ湯気を前にして、食べないわけにもいかない。手を合わせて、いただきます、と小さくつぶやいて食べ始める。おいしい。今すぐにでも主婦になれる、と料理経験のほとんどない私は思った。顔に思っていることが出ていたのか、私を向くソノの顔がますます嬉しそうに輝く。どんどんソノの考えが分からなくなってきた。

「ねえ、ソノ？」

一度箸を置いて、恐る恐る尋ねることにした。

「さっきの、あの部屋の、って何？」

「何のこと？」

すぐさま返された。ソノはにこにここと笑ったままだ。

「だから、えっと、あの、洗面器の」

「ユーってば、寝ボケてるの？ ま、そういう時は食べてすっきりしなさい」

ソノが手で促すものだから、つい言う通りにする。ソノが学校での些細なことについて話しかけてくる。彼女の笑顔と爽やかな口調を感じながら食べると、色々な感情が曖昧になっていた。

結局、片付けもソノは自分でやり、私に帰るように言った。そのまま帰ろうとして廊下を歩いていると、右手にソノの部屋が見えた。先ほどまで散り散りになっていた感情が再び形になる。

もう一度入ってみた。暗い部屋に廊下から光が差し込み、中心にある洗面器とその横のゴミ箱を浮かび上がらせた。全て夢ではなかった。

すぐそばにあったスイッチを入れ、電灯をつける。周囲を見ると、左手にある不気味な棚がまず目に入る。触ろうとは思えなかった。

右手には勉強机があり、教科書が整頓されて並べられていた。その中で一冊の本が上に広げられていた。大きさからして教科書の類ではなく、上部に付箋がいくつも貼られていた。開かれたページにも青色の付箋がある。鉛筆で囲まれている文章があり、こう書かれている。

『全ての人間が異なっているなどというのは嘘にすぎない。自分と酷似した部分を持つ人間はいくらでもいるし、全ての人間は「人類」という同じ一括りだ。他者より突き出した個性など、一握りの人間にしか与えられていない。天才か狂人だ。』

そう言うと、出生地や経験の組み合わせ、家系などのこまごまとした違いを挙げて反論する人が必ず出てくる。しかしそれならば、面接試験において全員を、それらの差異によって合格にすればいい。それらの差異のみによって、誰かを愛せばいい。この世界で認められる個性など、ほんの一部なのだ』

文面がページごと目に焼きつくようだった。

そこにソノが帰ってきた。私の横を素通りする。すれ違う際に、彼女の顔を見る。さっきとは一転して、瞳がらんらんと輝いていた。今まで見たことがないほど生気に満ちている。ようやく、どちらが現実でどちらが素顔なのかを察した。

ソノは部屋の奥で立ち止まり、窓の向こう、どこか遠くを見つめていた。後ろ姿しか見えないけれど、きつと瞳に映っているのは未来。私のことなど視界に入っていない

ない。

光にも似た広く確かな思いが、私の心を包む。
これが、彼女の儀式を見た最初の日だった。

次の日の目覚めは格別に良かった。胸の奥に重いものがのしかかる感覚がない。見る物全てに怯えることもなかった。

母と姉が起きている。父はまだ寝ている時間だ。姉とテーブルについて新聞を読む。朝食の準備をしている母が、テーブルの方に顔を向けた。ちょうど目が合う。

「晩ご飯要らない時は連絡してよね、真由」

真由の顔を一切見ずに愚痴をこぼす。

「お母さん、どうして、そういつも百合と私を間違えるの」

真由本人が不満そうに言う。表情には半ば諦めがこもっていた。

「え、ちゃんと『百合』って言ったけど」

「言っていない」

時折こういうことが起きる。以前はその度に心がしわくちやになる思いをしていた。だからと言って、きちんと誰かから名前と呼ばれることにも軽い抵抗感があった。

中学の頃、母はくだらないいざこざでパートの仕事に嫌気が差し、一時はさぼって怠惰な生活を送っていた。他の家族が家事を肩代わりすることが多かった。ある夏の日、父も姉も不在だったので一人で二人分の昼食を作っていた。簡単に野菜を炒めて味付けをしていると、テレビタレントのやかましい怒声と一テンポずれた母の馬鹿笑いが、遠い居間から聞こえてくる。

お盆の上に野菜炒めの皿を載せ、ご飯を茶碗に盛ってお茶まで添えて母の前のテーブルに置く。すると母はこちらを向き、電話の対応や家族以外の人間に話しかける時のような、ワントーン高い声で大げさに言った。

「ありがとお、百合ちゃんを産んで本当に良かったわぁ」

冗談しか口から出ようのない顔で言ったことより、はっきりと、しかも「ちゃん」付けで「百合」という名を発したことに腹が立った。その時もう少しだけキッチンに近い所にいたなら、人参とキャベツのこびり付いた包丁で刺していたと言える自信がある。

けれど今日は何も感じない。母のあの発言すらどうでもよくなっていた。全てがゼロから始まっているかのようだ。代わりに、ソノが今何をしているのかをしきりに気にした。

いつもの時間に、ソノは教室の中にいた。言葉も行動も、何一つ普段と変わりはない。眠い口調の授業でも彼女は積極的に発言し、昼食では六人で昨晚のドラマの内容を話す。再びくだらない授業を受けると放課後になった。掃除の後に適当な会話を交わり、そろそろと揃って駅に向かう。ソノは先頭を歩いていた。

まずはバスで帰るチホが別れ、路線が違うのでクボタが別れる。幸い乗客が少なかったので四人で横一列に座る。しばらく揺られていると乗り換えのために右端のワーコが去っていき、次の駅ではワーコの左にいたナナがさよならを言った。

さらに二駅過ぎる。扉が開く。そこで降りるべき人間は動かずそのままいた。ソノは一度だけ扉を見た。次に左腕の時計を確認する。そして何かを悟ったように視線を戻した。扉が閉まる。電車が動き出す。一度大きく揺れて二人の肩がぶつかる。けれど会話は生まれぬ。

最寄り駅の改札を抜けると、ソノは颯爽と進み出した。大股で三步分後ろから、黙ってついて来られても何も言わない。まるで誰もいないかのように、前を見て足を交互に踏み出した。

家にたどり着く。玄関、そしてソノの部屋、ドアの閉まる音が二回ずつ連続して響く。他の家族は帰ってきていないようだった。ソノは洗面器に水を張ってから部屋の中央に置き、ゴミ箱を隣に置くと昨日と同じ位置に腰を下ろす。

時計は六時十分前を示していた。ソノはあらゆる色で埋め尽くされた棚を見ている。一つを見てまた一つ、線と線を結ぶように視線が棚全体を行き来する。冷静な彼女の眼の奥には何か強いものが秘められていた。

かちっ、と音をたてて時計が時を知らせる。ぴたりと眼の動きが止まり、ソノは立ち上がる。一直線に棚の一点に向かい、それを手に取って元の場所に座る。そしてゆっくりと洗面器の中に落とす。ぼちゃん。手から落ちた濃緑の柄のグラスは、沈まずにゆらりと浮かぶ。

一言も言葉は交わされない。無断で家に入り、あまつさえ秘密であろう行為を見ている友人に対して、ソノは何の感情も抱いてはいないようだった。水に浮かぶ物への執着だけが見てとれる。二人の間にあるのは、電気の走るような緊張でも柔らかかに包み込むような許容でもなく、温度のない沈黙だった。

何分もそのままの体勢で黙りこくった後、ソノはそっとグラスをつかみ、ゴミ箱に落とした。他のゴミをそっと押し潰して沈む。それを見届けた瞬間にソノの表情が穏やかになる。しかし二人の間に流れる空気はそのままだった。

体操座りの体勢でソノを観察した。彼女は洗面器を元あった場所に戻し、ゴミ箱を隅に追いやって勉強机に向かった。鞆から教科書を取り出して予復習を始める。もうこれ以上、いくらソノの反応を待っても無意味だろう。そして、無反応であることがソノにふさわしいと思った。ゆっくりと部屋を出て行き、黙ったまま家へと帰った。

それから毎日、ソノの帰宅についていくようになった。平日にはみんなと話し、授業を受け、普段通りの生活を送る。そして二人でソノの家に向かう。休日だろうと遊びに出かけようと、六時近くになると部屋に二人でいた。

何も言わず一室に佇んだ。ソノが授業の予習や復習をする一方で、部屋にある本を読む。二人はそれぞれの時間を過ごし、六時になると何かが浮かべられる。ソノの日常に大きな変化はなかった。幽霊のような友人が傍にいて見ているだけだった。

ソノの部屋の本棚には、教科書や参考書に混じって様々な書籍が並んでいた。小説の類ではなく、新書が多い。一番ソノの近くにある本の背表紙には、「塾要らずの勉強法」「簡単調理レシピ」「起業のススメ」といった名前が見えた。それらの文章を何度も読み、ますますソノに強い尊敬の念を抱いた。

七時辺りになるとソノは勉強をやめて部屋を出て、自分の食事を作る。これも毎日のことだ。儀式の後に二時間ほどそのままいても、全く両親を見かけなかった。きっと他の家事も自分でこなせるのだろう。

部屋を出た途端に、ソノの口振りや表情が明るくなる。色々なことを独り言のように話しかけてきた。何度も同じ変化を目にする内に、だんだんと外でのソノをこの家で見るのが嫌になり、六時を過ぎたなら極力早めに帰ることにした。

二度と、儀式についてソノから語ることはなかった。

ソノの儀式は、どの日も六時近くに行われる。例外はない。時計がその時間帯を示すのを確認したとたん、ソノの眼に鋭さが増す。六時という時間は自分で決めているようだった。誰かや何かに支配されることなく、毎日六時に自分で浮かべる。同じ時間に起こるのではなく、起こす。

毎回様々なものが水面に浮かべられた。ある日は雑誌の切れ端だったかと思うと、次の日はピルケースだったりする。規則性はほとんどない。唯一の共通点はと言えば、水に浮かんでなかなか沈まないことだけだ。

その日の出来事との関連もない。文化祭準備の打ち合わせ後にアルマキャンドルが浮かび、進路選択の用紙の締め切り日に綿のスカーフが浮かんだ。

それでもソノは、浮かべるものを自分で選んでいる。部屋の棚を見ている時の彼女の顔は真剣だ。何も彼女を妨害することはできない。六時になるまで探し、何らかの確信を持って一つに絞っている。

一度、早めに学校が終わった日に、ソノはショッピングセンターに向かった。悠々と歩きながら何かを探していた。その眼には、何を浮かべるのか選んでいた時と似た力が宿っている。あの雑貨店でのように、直接商品を手にとって、棚に並べる物を買おうとしていた。

彼女の選択には奇妙な規則が働いていた。一度商品に触れたり持ち上げたりして水に浮かぶと分かると、次は全く迷わない。商品棚に戻すか、カゴに入れるかのどちらかだった。驚くほど短い時間で決断する。手に取った物の九割方は棚に戻されていった。残りはカゴに放られる。数十分後、買い物カゴは様々な水に浮かぶ物がいくつか入れられていた。他の規則性はない。

棚に置かれる物、浮かべられる物。恐らく彼女自身でさえ、どういう基準で選んでいるのか分かっていないのだろう。ソノのそばにいる内に、ソノの考えが少しずつ分かるようになっていた。商品を選択しているのは多分、直感だ。

買いたいから買って、浮かべたいから浮かべる。そう言うとおかしな顔をする人が多い気がする。理由がないと何故いけぬのか。時には、それが正解としか言えないこともある。ソノの場合もそうだ。一言だろうと長文だろうと、言葉で無理に説明すると真実が歪められてしまう。世界が狭くなる。それが嫌だから、ソノは衝動のままに動いているのだと思った。水面に浮かび上がった感情は、言葉を通さずに処理される。彼女は、言葉の大切さや心の複雑さを誰よりも理解しているのかもしれないし、ただ単に言葉にする勇気がないだけなのかもしれない。

閉ざされた部屋の中で、直感のままに毎日何かを浮かべ、そして無慈悲に捨てる。ぐちゃぐちゃのまま。ソノは何をしたいのか。何を得ているのか。

その儀式はきっと、彼女なりの反抗の形だ。この社会に対する反抗。社会の水面にぶかりと浮かぶ、軽くてけばけばしい物を軽蔑し、切り捨てる。

彼女にとっての水面上の物を考えてみた。今までの人生を思い返すだけで、嫌というほどに思いつく。友達と称する生ぬるい監視の輪、話題と歩調をぐにやりとねじまげて合わせること、ノウハウの習得を競う勉強、教師たちの価値観の強制、「良い子」であること。自分を押し潰すこと。どれも、どうしようもなく意味がなく、そして避けようのないことだ。多分ソノは、みんなよりも広く水面を知っている。そしてみんな以上に傷つき、憎んでいる。

建前を作って生きていくことは社会の中で必要とされる能力だ。けれどソノは服従することも諦めることもなく、強い意志を持って反抗する。たとえ冷たく閉じられた自室だけだとしても、日常になんら変化はないとしても、水面をはっきりと否定し、自分を貫こうとする。毎日同じ時間に同じやり方で儀式を行う。誰かに訴えるわけでもなく、自分以外の何にも依存せずに抗うその姿勢は凜々しい。世界でただ一つの希望のようだった。

一人抗う人間と、一人観察する人間。二人の間の空気は、ひっそりと水面のように、とぷりと波を立てるだけ。

儀式の時間に一緒にいるようになってから、一ヶ月が経った。しかし、二人の時間が永遠に続くことはなかった。

塾に、通わされることになった。成績が下がったことに対する母親の処置だった。担任からの提案でもあった。週に二回、夕方から夜まで受験に向けての対策を叩き込まれるらしい。その二日間は、ソノの家に寄ることはできない。けれど、抗うことはしなかった。諦めが心をつかむ。ソノとは対照的だ。大人しく受け入れ、入塾申請用紙に必要事項を書き込む。あまりにも無力だ。

「かなり成績が悪かったみたいで、塾、行くことになっちゃった」

昼食の時間に、それとなくいつものメンバーに伝える。ソノ以外の人間には、塾に入ろうと関係のない話だ。「ふーん」という反応が返ってきた。ソノも特に変わった反応を示さない。

その日は塾がない曜日だったので、二人でソノの家に向かう。やはりソノは口を開かない。目的地だけを見据えて歩くばかりだった。水には下敷きが浮かんだ。何も変化がないことを見届けると、まっすぐに自分の家に戻った。

次の日、塾は初日の制度説明だけで終わり、五分ほど自転車に乗り、七時ごろに彼女の家に立ち寄った。彼女の部屋にしか電気はついていない。呼び鈴も押さずに玄関の戸を抜け、部屋に入った。ドアをそっと開けると、ソノが一瞥する。そしてすぐ、教科書に顔を向き直した。ゴミ箱の中には、蛍光色の人形が下敷きの上に捨てられていた。ソノは黙ったままだった。

すぐにソノの家を出た。一人取り残された孤独感が心を占め、全身が沈み込む感覚を覚えた。

塾のある日以外は、できる限り二人一緒にいた。離れていると不安で手が震えた。何もかもを失う予感がした。どうしてなのか、本当のところは考えても出てこない。ソノといることが、心の重要な部分を満たしていたのだと思う。

周りからは、ぎりぎり不自然でない関係に見られていたのだろう。チホやクボタから何度かからかわれたが、眼は本気じゃない。ソノは、仲のいい友達と見られている分には構わないようだった。何も変わったことは言わず、いつもの話題を振ってきた。

塾が終わる八時頃から、黙り込んだままソノの家は何時間も居座った。ソノの本を手にとって読んでみても、何が書いてあるのか、全く頭に入らなかった。

夜十時前になって、玄関が開く音がした。女性の声がかすかに響く。ソノは玄関に向けて、「お母さん、お帰り」と呼びかけた。沈黙が壊される。

「誰かお友達が来てるの？」

多分、玄関にある余分な靴を見て言っているのだろう。声を聞いた途端、なぜか不安になる。ソノは何も答えない。

「園子？」

ぎきい、という音を立てて部屋のドアが開かれる。声の主は、ぱりっとしたスーツを着込み、いかにもキャリアウーマンといった女性だった。夜闇が入り込む部屋に比べて廊下側は煌々と明るく、ドア一枚を通して外の空気が部屋に侵食してくるように思えた。

「あら、やっぱりいるじゃない。クラスの子？」

「うん、そう。勉強教えてる」

外と世界が繋がるやいなや、ソノは部屋の外でのソノになった。

「お名前は？」

「笠井、百合ちゃん」

「笠井百合ちゃん、ね。園子がいつもお世話になってます」

ソノの母親が名前を反復した瞬間、もう元には戻れないと強く感じた。心の穴が一層広がる。それ以降、九時まで家に離れることにした。

一日一日がすぐに過ぎていく。塾は学校よりもつまらない。学校はソノの家よりもつまらない。塾の後にも必ず、ソノの家に行った。ゴミ箱をのぞくたび、孤独を感じて胸が痛んだ。今度は、この痛みが永遠に続くように思えた。

塾に通い始めてから二週間が経った。ちょうど、塾のくだらなさを紛らわす手段を見つけてきた帰り、九時ぎりぎりのことだった。

「え？」

つい、声に出てしまった。沈黙をまとう部屋には不釣り合いな高い声が、一気に場を乱す。ソノの体が止まる。

ゴミ箱の一番上に、何もなかった。あるのは昨日捨てられるのを見たシールセットだった。ほとんど乾いている。無言で机に向かうソノの背中をじっと見た。ソノの体は凍りついて動かない。何かを抑えているようにも見えた。

どうして六時を過ぎてても今日は何も無いのだろう。ソノが自分の意志を貫いて抵抗

している限り、一日たりとも例外は無いはずなのに。

見間違い、もしくは間違えて誰かに他の場所に捨てられたのだろう。そう思い込むことにした。ソノは真面目に机に向かうばかりで、何も反応せず何も言わないまま九時が過ぎた。どこにも今日の儀式の欠片を見つけれられない。背中を襲う恐怖から逃げようと、何も聞かずに急いで家を出た。

次の日、ソノは全く普段と変わらなかった。だからこそ笑顔がまぶしく作り物のようだった。儀式について話しかけても無駄だろうと気付いてやめる。ただ、いつものように傍にいて笑う。空しかった。

放課後、六時になると絵葉書が水面に浮かんだ。一体、昨日何があったのかはよく分からなかったけれど、浮かべられ水びだしになった絵葉書がゴミ箱に捨てられるのを見て、空気のように不安が抜けていった。次の日もその次の日も、放課後六時に何かが浮かぶのを確認した。

そして翌日、塾帰りに寄った。夜八時を過ぎていた。

新しいゴミはなかった。ぐしゃぐしゃになった絵葉書の見せる山地の緑が、まず目に入る。ためらいなく中を漁って探してみたけれど、今までの二人の記憶が詰まっているだけ。どれも乾燥していて、私が触るとぼろぼろになった。洗面器には透明な水が張られたまま。いくら部屋の床を見つめても、手入れの行き届いた絨毯はまっさらだった。

驚きというよりも、価値観の崩壊を感じた。今まで信じてきたものに、不協和音が鳴り響く。

ソノは、何も言わない。こちらに背を向けて勉強を続けるばかり。けれど、心なしか体が小刻みに震えていた。空気が、泣きながら濁っていく。

「ソノ？」

自然と胸に湧き上がる疑問など、ソノはとっくに分かっている。それでも聞かずにはいられなかった。

「ねえ」

どうしても聞きたいのに言葉にならない。喉の奥まで出かかっているのに、あと一歩の所で思いが形になってくれない。空気が嗚咽する緊張の中で、沈黙がまた訪れる。

ソノから眼が離せなかった。何が起こり、何が変わっているのか。考えても答えは出ない。

しばらくすると、ソノが回転椅子を回してこちらに振り向いた。背中が弱々しくカーブし、何かに怯えるような、耐えているような縮こまった表情をしている。私と眼を合わせようとしない。こんなに小さなソノを見たことなんてない。恐ろしい勢いで世界が崩れていく。

上目で一度こちらを見る。口の辺りをもぞもぞ動かしている。ソノもまた、何かを言おうとして言葉にならないようだ。すぐに眼を反らし、部屋全体へと視線をさまよわせ始める。どことなく必死な目をしていた。

ソノを黙って見た。次第に、ソノが視線を向ける範囲が狭くなっていく。それに合わせて、彼女の体が縮んでいく。震えを帯びていく。何か自分の中にあるものを外に出すまいとしているようだった。

そして。

耐えかねたソノは、檻から解き放たれた猛獣のように、あの棚の中、あらかじめ決めていただろう目標めがけて飛び出した。目標をつかむとすぐさま、水面に投げつけた。

それは水面に浮かび、すぐに沈んだ。

ソノは一向に浮かび上がらない小さな鮫の置物を見てから、顔をこちらに向けた。微細な不安が内側でうごめいていた。そして、一気に泣き出した。爆発と言っているほどの感情の奔流だった。

鮫の置物は沈んだまま。時計は八時三十二分。ソノが爆発した。私は今、ここにいる。

ああ、と息が漏れた。全身から力が抜けていった。ああ、そうなんだ、と全てを納得する。それも一瞬の内にだった。あえて例えるならば熱を内包する水流のような、言葉にならない感情が私の胸を満たしていく。もう孤独も虚しさも感じない。

彼女の六時の儀式はいつしか水面に浮かび上がり、彼女と私の儀式になっていた。

ソノはまだ少しだけ泣いていた。もう声を張り上げることはなく、床に手をつけて地の底に向かって伏えている。誰かと儀式を共有しようとする自分の弱さを嘆いているのだと思った。

「ソノ」

ソノが私の顔を見る。ようやく、私の言葉に反応した。

「一人ではいられないくせに、結局一人なんだよね、多分」

それが私の答えだった。

今まで無力だと思っていた自分の欠片は、実は誰かの中に沈んでいた。そして今、ようやく浮かび上がって姿を見せた。

私は消せない。だからソノにはなれなかった。私はソノじゃない。みんなでもない。私は私以外の誰にもなれない。それは多分、とても残酷な真実だ。

「ユ一」

ソノが呼ぶと、透き通って聞こえる。ユ一。自分で自分の名前を呼んでみた。やっぱり音はどこかに消えてしまう。それが嫌ではなかった。どこかに霧散するということは、言い換えるとこれからどこにでも行けるということなのかもしれない。

「ソノ」

また、彼女を呼ぶ。ソノが私を見る。

ここが私たちの儀式の終わりだ。

きっと明日からは、部屋の外で何かが始まる。

[戻る](#)